

安

方

忠

義

傳

卷之二

前編下帙四册

13  
1305  
6





1305  
6

ごとく。半夜油尽なり燈火似たり

松島

第十五條



かして其の賊。良門が襟首とほりて。已みひきさすと斬  
 やぶんにたる所。良門たりまち起上り。一声呀とさけびて。刀の  
 繩をふりとさる。いそばく足を飛して。其の賊を踢倒し。刀を奪取  
 て。首をさる。と打落しけし。く大口ひびいて。只西死れたるあり  
 あり。良門たり。刀とさる。ひて。簀子の上。つけ上り。大王を目掛けて  
 斬はれぬ。大王鉄の燭臺。以てさる。し。とけし。そのひきさ  
 大太刀。以て相ひひ。丁と志とさる。ひきさ。二人の劍術。法より  
 一来一往。一公一回。秘術。以て。火花を散り。戦已み五十餘合。ふ  
 け。とさる。雌雄を決せむ。勢互に猛烈あり。大王ハ牙の

善如卷之四

十六



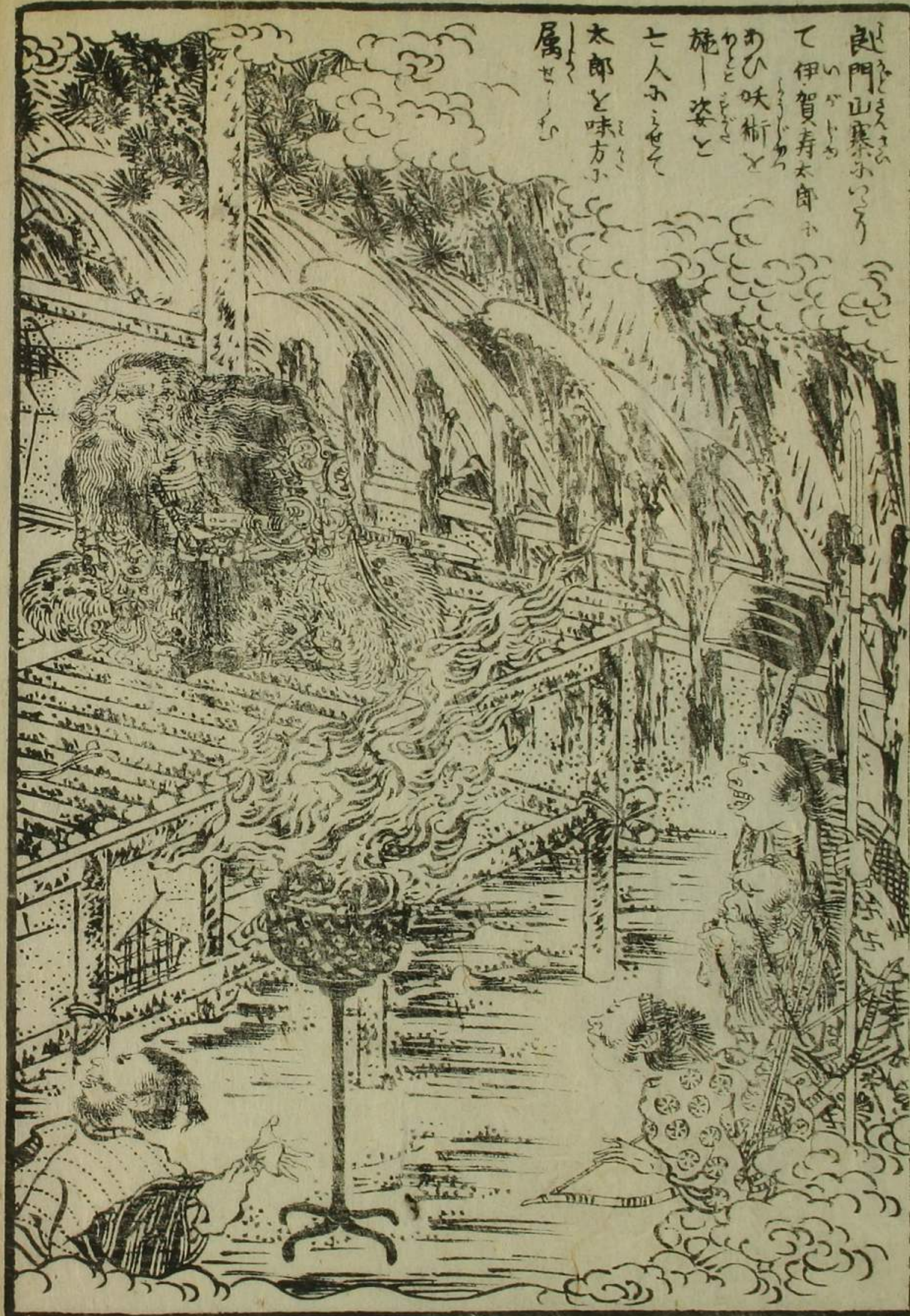
たけ途はたかく。左右の腕をもちだちて。老松一葛葛の巻はたれら  
如くある。力もあつて生かげりて。金剛力士のあれたるへ。かうぞ  
あつめとあられなる。良門をあつめくの身材あれば。立ちあがり。為体  
猛席はひらふ羊のごとく。荒鷲の前の燕は似て。いとあやうげ  
なれども。力量武藝も。うらととつれり少く。大王の剣法は。まじく  
乱れければ。さうく飛ぶさうり。やれあつて。待た敵對せざる。証  
據は。かくのさかりこつひて。良門が。日さへ太刀をかくことあげ出  
ければ。良門も手取さめりて。ひえたり。大王恭しく。ひひく。某は  
やどり。君の容貌を見あつて。たゞ人なごごひ。白鳥。ワごと。死  
礼を行て。試し。ほろよ。果て心気のかさあり。剣法の神妙。九人の  
所為。あつて。あつたれぬ。かゝる。御姓名を。おしむ。こと。誠丹

信伏の体あり。けり。良門打笑て。いそ。汝もあつめく。の賊少い。あつて。今のを  
られ。を。さう。小武藝の妙所を得て。実へ某等。が。あつ。所。あつ。は。殊更老  
年。は。似合。さる。強氣の。あつ。小。怪む。を。先。女。が。実の。姓名。は。因て。後。我。素  
姓。を。かく。は。と。そ。刀。は。背。後。小。あ。げ。やり。々。は。大王。い。そ。容易。は。実。の。名。  
た。ぬ。ぬ。も。理。あり。あつ。は。先。某。が。名。は。名。告。出。し。某。は。是。房。前。の。三。男。眞  
楯。の。苗。衣。田。藤。氏。の。嫡。流。たる。西海。の。猛。将。伊。豫。椽。純。友。の。股。肱。耳。目。と。よ。は  
と。たる。伊。賀。寿。太。郎。が。や。り。ぬ。る。を。て。少。と。立。山。の。地。獄。と。や。き。は。則。此。山。に  
小。ゆ。は。綽。号。と。活。閻。羅。大。王。と。称。し。三。角。眼。太。郎。回。々。鼻。次。郎。か。と。よ。て。陰  
司。地。府。の。称。号。は。以。て。手。下。の。者。あ。り。名。告。せ。し。と。よ。良。門。同。も。あ。つ。て。と。よ  
天下。よ。その。名。を。さ。さ。る。西海。の。豪。傑。あ。つ。て。あ。つ。と。け。り。今。ハ。何。と。り。け。む。む。べ。れ。  
人。王。五。十。代。の。帝。桓。武。天。皇。五。代。の。曾。孫。前。将。軍。平。良。将。の。嫡。男。平。親





伊賀守 伊賀守



伊賀守 伊賀守  
て伊賀守 伊賀守  
あひ 伊賀守  
施 伊賀守  
七人 伊賀守  
太郎と 伊賀守  
属 伊賀守

伊賀守 伊賀守

七



王将門が一子。幼名平太郎為人。良将将門の両字城より。相馬太郎平  
良門と名告ハ我妻かりと。いふも云も吹くさるふ。伊賀寿太郎をとりて  
よりてまはび果して其が推量ふたがいざりけ。将門君のこゝれがごと。其み  
おもと同一。由急何とぞ謁しなりて。我心底をせしことえんと願ふ。今言  
えらむ。尊顔を拜する。其誠是天のひた合せなるべしと。禪をむつと  
上座よと云。簀子の上み額をほけて敬ける。良門もなのみあふとまはび。  
我亡父孝養の爲一擧の義兵を起すと。とさぬぐみ身を粉して諸国  
をめぐり。味方城集るといふも。守と補佐の良将を得と。夫のこ愁けり  
母。えうとむも。汝ふ遇し。大儀成就の瑞相あるん。されねど汝が下手の賊  
ご。比山の大王人膽を好むといひは。ゆゑ心ふくことみる。殊更強箇  
をなじて加勢をとり。大鼓を打て人数を退け。貝をふき。猛火を發

一疋母おとし。又苗をあげして人数を集る。蹄令おのぐ。法則あるを  
以て大王と称する。いふ。あのみあふこと哀し。見奉る。味方あつらん  
と。歎し。いざと捕してこ。みまりぬ。我肉芝仙といふ異人。みあひ。天  
竺蝦蟇仙の傳法。蝦蟇の妖術を予び。露を起し。雨をよび。兵を  
辟。自縛を解の術を得た。たと。阱みおち入る。いふ。でう脱さる  
ん。我術の妙をいふ。と。いひて。予母印をむき。口は咒文。以  
てあふるとひじく。良門が姿七人とあり。いづれを假の姿。いづれを真の  
姿と辨。どが。い。や。あ。とて。六人の假の姿。い。尽く。え。失。け。ぬ。が。伊賀  
寿を始。衆賊。い。か。呀。と。感。心。る。声。あ。ぐ。ぐ。い。か。な。ら。り。け。ぬ。良。門。は。首  
み。の。け。た。り。衣。の。う。ち。より。大。政。官。の。印。錦。の。旗。将。門。が。髑。髒。三。ツ  
の。物。を。取。出。し。こ。を。せ。け。し。が。伊。賀。寿。を。拜。見。し。此。官。印。を



そのうち某奪得て将門君みさくげたるが時いつて再つる奇りさ。奇  
妙の術を得むふらん。官印御旗あるゆゑ味方と集る便十分なり  
将門君陳中よて影武者をほむむひ。御姿を七人ふんせむひもるひ  
ひさしぬ鬼神をあざむく猛将の本懐もそげむらぶ。かく白骨となん  
あふひさし。冥途に於てもこそ口とく。おぼさぬこそ。不覚の涙  
をおとじけるあくまを強気の者あれども。ささく老の癖あふ。伊賀  
寿つてわけてひひひ。あひ出せし昔語こそあがけとごも。御同くされ  
う。某吉い去る延喜年中伊勢国鈴鹿山よそ亡たる山賊の頭領  
伊賀寿丸が孫を。祖父にて後伊賀寿太郎と名告第ハ伊賀寿次郎  
と申し兄弟とも播磨国に住て山陽山陰両道の海賊等と手小  
ほけ。頗威をふむひびりぬ。あつるふ去る。兼平二年将門君と純友殿

と合体し東西の兵を起しあ折し。我く兄弟純友との味  
方あつた度この合戦に粉骨してそわつたゆひ。第次郎ハ黒崎合  
戦の刺し打死し。純友との御一。さかしてさひむひぬ。漸々  
小たの。さけりあくる。純友との密に某をわけてあせけり。我運命  
もろや尽たつ。末子重太丸幼年あるこそ幸あれ。汝打死といつて  
生残り。重太丸をゆりて。再軍をおに。我本懐をさけり。あふ  
冥途にわねても。いつて遺恨をささく。さけり。わの心と涙あふ。よ  
命にまふよ。博多の船軍の折し。目さぬ死戦して敵の眼とく  
す。若狭国の住人神沢弥九郎照定篠田孫五郎利宗といふ二人の  
敵を小腰みえさみ。汝等我死出の旅路のともせよ。あんと戯れ。海  
中舟飛入。某曾て水練み達し。海上を陸地のごとく。おぼえぬ。水底



大宅太郎光国  
相馬内裏の  
雀御所  
いさぎと妖怪  
ころむ





をへつて一命をたのめをうけて軍の様子とうつひつる。純友どの  
 八重太丸どのを具して伊豫国三津の濱までちり行む。かの国の警言  
 固小居る。橘の遠保より前者の為小父子とも小生捕む。此日は是  
 天慶四年六月十日あり。純友どのの深手をひいてその夜のちり  
 逝去しむ。重太丸どのの京よひくれ。六條河原まで斬とむひぬ。そ  
 純友どのの遺命も。某が存念も。水の泡とかり。已に腹くさる。そ  
 主君の死路も追つんと存せし。一旦敵をあらはして。打死と  
 め。たるこそ幸なれ。権りて人再味方を集て兵を起し。主君の  
 ちりひ軍せんと心と決し。此山中ひかれ住。已に今一千餘人の味方と集  
 とある。時々ほどて軍と起さ。なを味方をとめんと。人膽を好ひぬ  
 ころを大膽強気の者とな。ころころと捕りて。試る。一人にして真の

大夫夫ふあひのど。あてとも。老のむなる。み。かくて。入。とも。本望六とび  
 び。一向これを愁居たる折も。ころほど。君ふあひを。こと。や。せの  
 ころ。大望成就の瑞相と。べ。と。語て。轉。む。び。み。た。べ。ど。小賊ふ。途。一。合  
 の唐櫃と取出に。めて。良門が。前。よ。お。た。これ。ころ。純友どのの。秘。流  
 せ。れ。藤丸どのの。鎧。か。る。某が。軍。功。は。賞。と。て。な。り。つ。今。ふ。い。り。て  
 所。持。仕。り。ゆ。と。て。その。出。して。ん。せ。な。れ。良。門。これ。び。一。者。昔。は。旧  
 物。う。純。友。の。の。の。鎧。と。こ。父。の。髑。髒。を。ひ。く。り。て。我。と。汝。と。会  
 盟。さ。る。兩。將。あ。ら。び。此。世。ふ。生。と。の。で。も。同。然。あ。ら。む。と。い。ひ。け。れ。伊  
 賀。寿。す。ま。く。ま。び。小。賊。み。命。と。て。俄。酒。宴。さ。す。け。め。時。の。ま。ま。で  
 御。才。ひ。か。じ。あ。ら。び。所。究。竟。之。今。より。山。寨。の。頭。領。み。君。み。あ。づ。り。お  
 不。肖。なり。とい。とも。某。補。佐。も。り。て。大。儀。を。と。げ。さ。せ。り。と。と。有



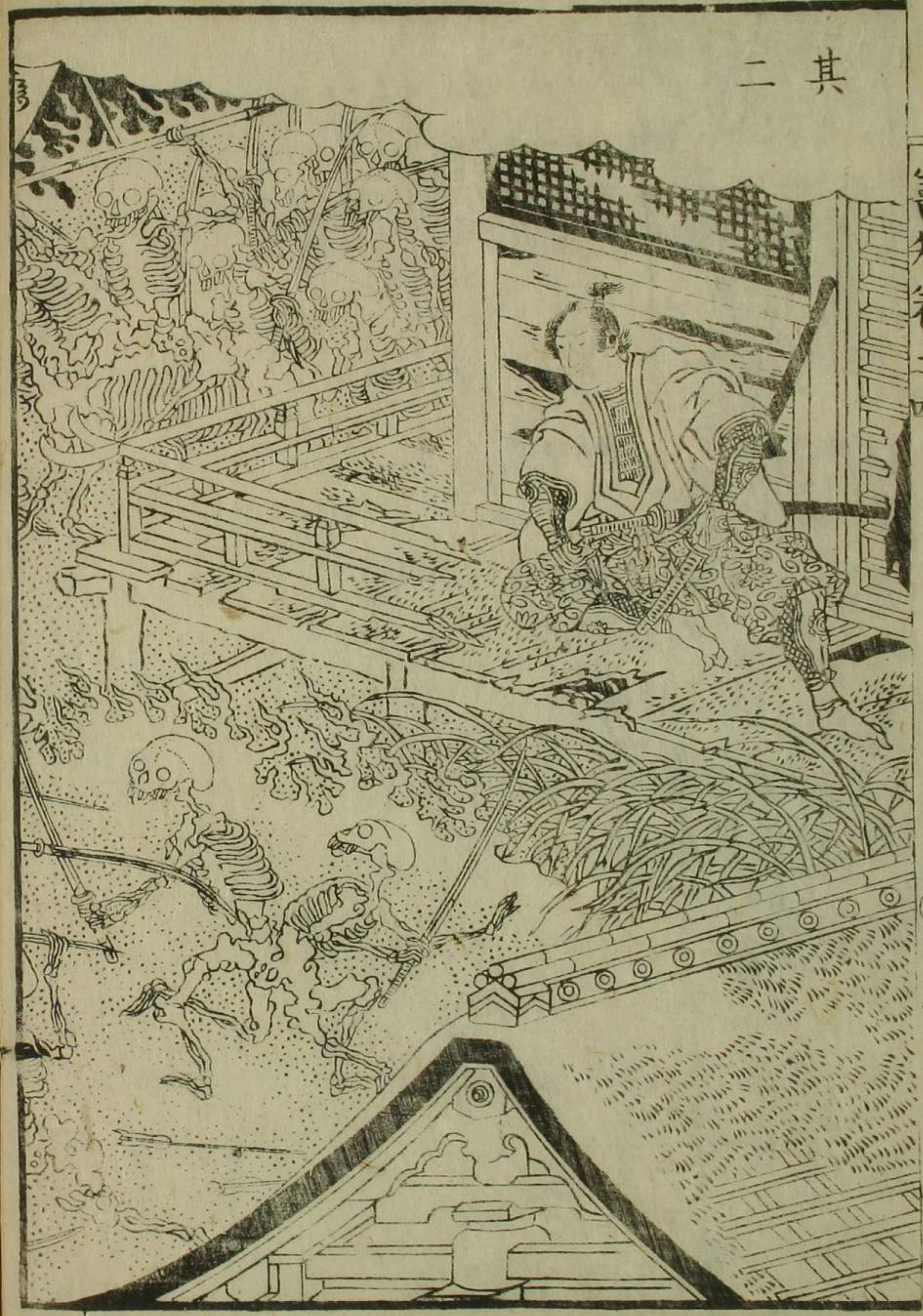
母そあへい。免と山鳥狐うけて長柄の熱酒母血をまがり。ほく。園  
唐土春秋の会盟の牛の血をまがりて金鉄の誓をませし。今  
金鳥玉兔の日月以て誓とまがり。の牛血母のまがり。殊更心  
の藤家の氏神春日の神供之鳥はまがり。熊野の使者。牛玉起請  
の根本ふゆのまがり。大杯母ほりて互みられをくらみ。あまの手  
下とまがり出して良門を拜させ。残酒をうつて飲しめける。夜はあぐ  
とおけつりける。たふ酒宴あやむ。良門伊賀寿が年齢をひたふ  
七十一歳とこたふ。その年高して力量の衰ぶるを感ゆけし。伊賀寿  
解ぬ来しをひける。昔若くはころの千万騎の官軍も物の故とせ  
まじ。年老たふ。はまがり。矢猛心もまがり。力量も  
様おふえい。いとおかり。なり。とひひ。大ある。銅の燭臺をニツと

喜て。繩おちひてぞ出りけり。良門益感嘆しけり。伊賀寿の君昨  
夜人づつと打大木根こたふ。いひつ。は。い。の御力量おを  
せん。面前拜見ほり。たたく。の良門打笑何なる。あやりと  
顧けり。笈の水をたたく。大盤石のあやと。つ。立。よ。て拳をま  
て。一打うちけり。盤石まるとニツおひれて。水ハ四方ふ飛らり。伊賀寿  
大おあられ。誠は希有の大力。おと古。あ。ひ。て。これ。実の  
力量の。おあ。の術と。まがり。伊賀寿の  
ひける。昨夜小賊等君と林の。お。お。び。れ。の。猛。火。の。う。ち。お。つ。  
の。め。て。其。計。策。元。来。此。立。山。の。連。山。の。硫。黄。の。気。お  
け。地。上。小。燭。消。を。蒔。これ。お。火。け。前。と。放。て。火。気。を。く。つ。つ。時。ハ。忽。地  
下。より。列。火。と。生。じ。の。雷。火。の。如。し。君。の。力。量。武。比。類。あ

一書知事二四

廿二







御若年とて血氣ちまきが盛さかなり大儀おほいぎを企おこむ御方ごほうもあてなれり  
 深く入いるにひいへの進退しんたいの法則はふそくを失うひあふふ似にたり若陣わかにのうち小劍せうけんの  
 差さをとりあひつゝ君きみたゝん蝦蟇せまが仙せんの術じゆつを放はなしあふも命いのち以もつてぬめられ  
 あふるるを畢ひつ竟じやう某この真まことの大夫おほおと夫むすめを得えずく欲あし生捕なまどりを好このむ由よしも  
 羨あやをとりあひつゝ幸さいふして君きみ以もつてあらむるをるる。あふ危あやう哉や某この曾むねて孫  
 吳ごの術じゆつ武ぶ經けい七しち番ばん小眼せうがんをさじ。あふく戦場せんじやうと經へて進退しんたい懸引けんひきの法  
 則そくをにしく得えるる所ところあり。あふゆがはく君きみ今いまより兵書へいしよと字あひ神機しんき妙  
 算さんの奥儀おくぎとさふめあふじとなふてあふの処ところもわくしけぬ良門りやもんは  
 もさんとて彼かの詞ことばを大おほ信しんト。あふより彼かを師しにて字あふべん心こころをささふ  
 けり。あふて良門りやもんあふく。此こゝ岩窟いがんくつ小住せうぢゆうける。あふあふ了らう角かくの形かたちあてあ  
 せんも似合にあひあふごととて吉日きじつをえさび元服げんぷくをさせあふためて將軍しやうじん太郎

姓名しやうじやう告あせける伊賀いが壽じゆいひける將門しやうもん君きみ再またあつと時ときあふかかあはをさ  
 かの大臣おほわかし理髮りはつハシれじの納言なうごんあんと元服げんぷくの儀式ぎしもおごさふ行やうあひ  
 あつち山寨さんざいめて何なにの礼儀れいぎもあふ元服げんぷくあふあふをさふをさふはくあふるん  
 さうりあふつひあひ衰おとろえの御衣ごいの袖そでをひるへして百官ひやくかんの朝あ加かあふ  
 うけあふ御方ごほうとあふ心を長ながくまらあへとのう良門りやもんのあふりあ  
 あふび未なたあふくそあはえけるあふりあうの石い楠くすのこと矯こせらあ割わりせ  
 合戦あつせんの營えいの外う他たあふく小賊せうさく等らと敵味てきみ方かたあふうち良門りやもん伊賀いが壽じゆ両  
 大将おほしやうとあひつて合戦あつせんのあひひれを調練てうれん。時ときのあふあ待まちてあふあ月  
 日ひあふあふらとあふ

衣え 山やま 第十一じゅういち 六ろく 條じょう

夫こゝれハ扱あつかひてあふあ又また大宅おほたけ太郎たうらう光国みくにハ武者むしゃ修行しゆぎやうあことよせて近国きんごくとあふり



妻唐衣かきひる陰の太刀のゆくると尋ずる小更ふその在所を去りて心  
中大ふ愁てほひふ陸奥のちてきてたぐひ行けり下総国より下り  
人の物語とてそのころ相馬内裏の跡ふ妖怪住人民おそれてそのあこ  
つふ近づく人もほいさむ将門殿一門の怨魂の所為なほいとや  
とのふ光国をれを同甘おむひやありけん道を急ごころり来りた  
ちふ下総の国みいり相馬郡おちうりて妖怪の實否ととりんとろふ  
は邊をて戰場の跡あれは一軒の人家もなく道行人もまれあは  
物とのふに便むたに折しも小雨ふと出しぬぐふ中ふ濡燕の  
飛ふふとて我も旅路不行暮てぬぐふさあめうのちありがと唯  
唯打連たれと我いふものふ妻もほいと愁と催し傍の木蔭に雨を  
避て居たる所おむひの方より山賤とせに男頭お村色の頭巾

とひれとて糸の針目衣の短と着ては夕木おひ斧を腰に袖まく  
アて来たるがこれもお蔭木蔭ふ立より雨やうと光国こそ幸と  
相馬内裏妖怪の實否はひけり山賤とて多の旧御所の妖怪虚  
説おあがどなる天慶三年二月十四日将門殿一門残らざむひ新  
内裏兵火の為ふ焼亡てびぐふ乾の隅の七八方二所をりの所  
焼残や官兵も将門殿の猛威をたてあが靈の祟は地をれて  
こむち捨もせどその終おれて誰ひとり手はつくる者もなく唯崩さ  
いふて今あも焼亡の地の莽とたる草むとあり一ツの不思議といふ  
冬も草の枯るといふ夏あく四季の草花常ふ咲乱るちふ桔梗の  
花の咲ざらふよりその所と今桔梗が原とやとありと  
戦死の人の屍の後山ふらる其所以今将門山と名づけんべうあるふ

桔梗の花  
後編  
詳





善知卷之四



二具

善知卷之四



近ごろかのうたれたる古御所不妖怪住異類異形のりのあつたふよと  
 人おそれて近よむと。おろふ将門殿一門戦死の人の亡魂をば。ちろ  
 ろの武者修行わんどひびきり。武勇あむる者おろの妖怪の沙汰  
 を同ぢらび。たじろんとそが。こふゆる者あむとあれども。つふ妖怪とらん  
 とどけて生てうらなる者と。同ど太刀刀のわらうふ横たふとど。真奈の  
 大夫夫のせれわらうふやとのひひ。光国が打扮はるそ。この由じまへんが  
 も刀城おびむひつうお。无礼のことと。瓜やしつとひひて。おんととど。光国  
 よびはし。つ古内裏へ行道のいづれをとまひければ。山賤その道城さ  
 へへて足がつか走りおはぬ。光国の妖怪となほ。おんととまふ心とらわれ  
 巴日のうらうらあも。うぬむじ山賤が。おんたる。おん行けら。おれがひひふたを。  
 四方は茫と湯ここして。おろりもあねむ。比し。も春のあふ。おろり。お夏の時

のことく。草深く生茂りて。露濃ある野原は。時しも野寺の鐘入相を告て。日も  
 とや西小沈雨雲のあちかし。うらふ暗く。うらふ風騒くと。乱草の上。吹渡りて  
 いとさむし。うらふ人の。往來たえ。うらとえ。道とおぼ。ん方も。わげ。高  
 く生たる草を踏分つ。おろの旧御所の。方ふ。あや。東西たふ。辨せ  
 ざれば。其便を得む。このふ。こと。おれ。と。あ。ま。く。空。ま。ゆ。り。て。思。安。家。げ。ふ。頭  
 の上。小。聴。こと。わり。ひ。く。声。を。打。あ。ふ。む。ひ。て。雲。間。の。星。の。光。ふ。る。れ。お。鞠。の  
 や。う。わ。る。白。き。物。空。を。ひ。く。と。飛。け。う。光。国。も。あ。い。れ。ま。か。の。ち。妖。怪。の。所。為  
 ち。走。り。ち。ね。ぬ。わ。つ。て。一。里。も。も。来。へ。ん。と。ふ。ふ。と。う。雨。雲。を。ら。れ。て。月。の。夜  
 み。あ。ら。れ。ぬ。影。玲。瓏。と。し。て。い。づ。れ。隈。も。か。い。辺。を。る。ふ。草。む。の。う。ら。ふ  
 四ツ足門の礎の跡あつて。空堀のあふ。木の葉ふらぐ。めれ。築城のうら。う。れ。たる

一書知卷之四

七



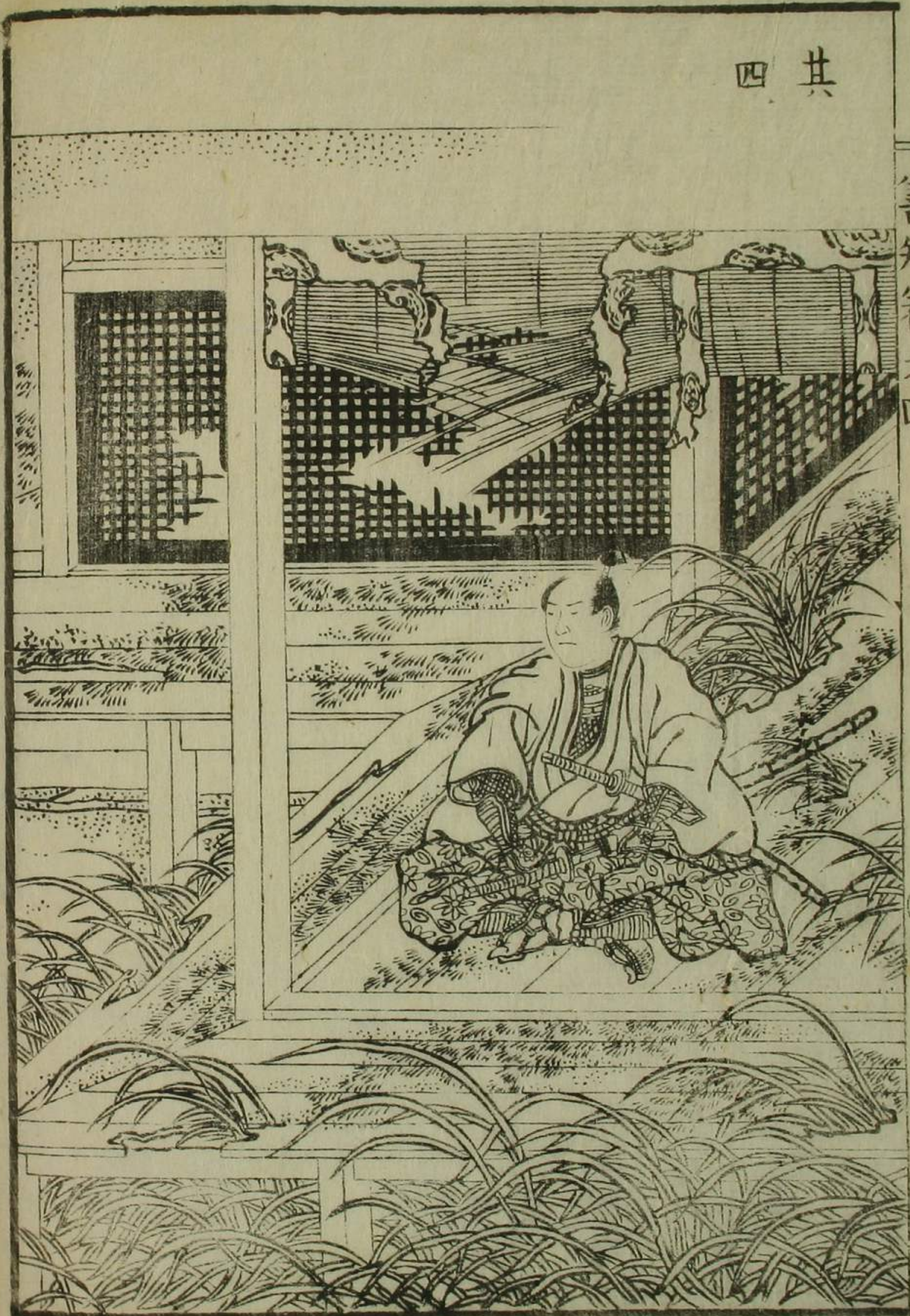
跡あども又へぬれ。新内裏焼亡の旧地ある疑はむの白き物をよくるぬ。  
 一の齧膝少せ。ちか飛回してなる木む。成く立さるゑたるうちにおちぬ。  
 さそいかしころそ妖怪のまもりあれと。のそいしく走行てなる果して此所古  
 御所なり。細ふその為体成るふ。いそぬあも焼残りたる所とつて松も  
 柏もつらぬ木どものそ焼てちかこころふ葛あつちむまこひて黒竜の卧  
 なる異あうぞ。唐博風の四ツ足門半焼残りたる。軒ひく尾あは桁梁  
 の折ち。今もたつとと危体の一連の地草蔓と生茂たるあふ太刀刀  
 の折ち。鏃のくそとある。人の骨のまみぐじたるやと打交りてちかあひぬ  
 ろふ奥深くたてはれぬる宮殿あつちれも崩のらとてあやうげなり。殿  
 上ふのろりてくろふ折戸あはと葎破と壁あは床ぬけて薄切をぬれ  
 塵ハ一寸さくすつり。蒸の未熟ひとちじたらあふ。狐兔の足跡のありて

いとまはじき体なり。あつち蜘蛛糸ひまじして下れる羽卒簾をほまた。棘あひ  
 つらてくけたる障子成はけぬれ。あはとふさびうあまどとひていふも妖  
 怪のまじりとまじり形勢なり。甘霖を画たる合天井をあはれぬ。枯目  
 小雨をふくく苔蒸て露ハ時雨れてうとちあれ。顔ふひやくとからぬ。  
 板敷をひくとくまじり。さかこをえぬらち。尾落くとひぬ。地  
 上小撲地ものちたる音けは。よの化物ごんをどと顧まば天井の  
 朽損たるがぬけちたる音あて。其うちより類百の蝙蝠飛去ぬあひ  
 の者かまば片時も足成とむる所あむむとのいふも。光国の膽を氣列じき  
 勇士たぬぬ。ちかく妖怪のゆうを待んとるひ。大紋の古裏宜のあつちとし  
 来り。殿の中央ふあはてその上坐し。四方成あつちを居りける。湿気  
 深く冷やうわる風床の下より吹あげ。まじりに月影壁のくははむと





其 四



善知卷之四



燈火ハたそねど。のとあはさうわら。かて志をく時をけけしども露  
 をももあはさげある夏もあはだ大退屈。かたぐ握はめたる拳をうち  
 をじく睡をりよはちまふ。一間なるちての暗所裏ことひびけければ光国  
 睡を醒してそふ床の下より青色紫のつらなる陰火燃出そのうち  
 骨七つ八つ飛出。生たる人のアふ太刀長刀を打ちて丁こち  
 打合けるが。あはる小廣庭み出来り。多く人類おちりて。つひに教百の  
 骸骨あがりつと一所せれまを集りて。敵味方とつらと涅槃經无常の偈  
 をかたさ。紙の幡をひりめし。竜頭の紗灯をおいて。双方大将とあはし  
 るが。全くつらきたる馬の骨み打乘て下知ら。れば法鼓銅鑼鏡磨の  
 ごとをなかり。物を打あし。おめささけびて戦ける。光国の坐したるまもつて  
 瞬もせせと又居たりける。あはさくありて雲霧あとのアふみえ失ぬ。

光国本意なくあむ我あま妖魔邪神のたらしむるへ。生捕して世の人の  
 睡を醒させんとおひつらふ今の様子。はる戦死の人の魂魄其散せ  
 ば。こころふとあむ。修羅の体相をあらわすことおあふあむ。むらぶを  
 魂を慰まらる僧徒の言つ所はて。武人のあはる夏あふむ。のあむ  
 足をせしことととひりつらふ。ねあけさはし何ぞ奥あふ化物出よし  
 とあむひけらふ。やどまらぐ仙間とおぼし。所み。鉦打あし。異口同音み念仏  
 をとらある声ととえければ。アておを起し。彼所みおれて。ひひつらふ。老  
 若男女の幽霊血なうけり。斬首以珠教つらふ。かして。百万遍とつら  
 こと。あむ。体たり。光国呵々と打笑。怨魂の集らふ。乗して。狐狸など  
 の戲る。さものれおあけたる。化さふよとのひり。手らあ。の石をこら  
 て。大勢の中へ撲地と投げつけ。たはる。皆同音み呀と泣きけびて。とえ失





其五



善知者



心家鳴 震動して異類異形の化物あつりれ出ぬ青鬼の両腕を頭  
 針のやうなる毛の生茂りたる口より火火をふきと飛出るもあり或は  
 頭小剣の了りたる角のくつとく生出此角龍鳥のごとくあらが裸才小緋  
 袴をきたるもあり或は角椽小目口生し手杵小四足生し追々追々  
 椽の上小ねり出たり光国は彼奴原何とやらんと柱小のうれて居  
 たりとけり不足等もあてそとえ失ける局とゆふに所の破とたる  
 壁のよとれぬよりさしのごとてえねば夫たる黒髪をふり乱し眉  
 太色音ざらて瘦あそとたる女房鉄漿の器をとり散して鏡  
 むらむ歯を染る体わりとくえてけしは鏡の女の童とおふにぬの  
 顔あどあつたりとくくよふくしと化物のくつ出たりとも手みたりとと



